

「南郷のトマト」の歩み

福島県 JA会津みなみ
西部営農センター

近 藤 一 夫

<地域の概要>

福島県の西南に位置し、周囲を越後山脈の急峻な山々に囲まれ、その間を伊南川とその支流が流れこれらの川沿いの標高370m～870mに耕地及び集落が形成されている。

年間平均気温は9.2℃の内陸山間型の気候で気温の日較差が大きい。年間降水量は1760mmと比較的多く、霜は10月中旬から5月中旬にかけて、積雪期間は11月下旬から4月中旬までの5か月におよび平均積雪量196cmの日本でも有数の豪雪地帯である。

たのが始まりで、当時は栽培技術においても暗中模索であり、また、消費地における消費量も少なく、価格が安く生産者が自ら地場売りに歩くという状況であった。昭和40年には「南郷トマト栽培組合」が組織され、翌41年には隣接する只見町や伊南村にも栽培が普及するとともに、水田利用による、“トマトー水稲ートマト”の輪作体系の確率により連作障害が克服されたことなどから、面積も拡大され収量も増加した。

昭和49年に町村を越えた、「南郷トマト生産組合」にと組織が発展的再編され、共販体制の強化

・気 象

項目 月	気 温 °C					降水量 mm	雪 cm		日 照 時 間
	平 均	最 高 平 均	最 低 平 均	最高極	最低極		降雪量	最深雪 積 極	
1	— 2.7	0.8	— 6.3	6.7	—12.5	111.4	284	113	62.1
2	— 2.4	1.3	— 6.1	9.3	—14.0	77.2	225	135	82.3
3	1.0	5.4	— 2.7	12.8	— 8.4	57.0	139	116	123.9
4	7.0	13.5	1.3	23.5	— 4.4	60.8	40	45	181.7
5	12.9	19.5	6.5	27.4	— 0.6	101.2	—	—	153.3
6	17.9	23.9	12.4	29.9	6.5	100.8	—	—	119.3
7	21.1	26.5	16.9	32.0	12.6	157.2	—	—	112.8
8	22.8	28.9	18.3	33.0	14.4	110.4	—	—	160.2
9	18.4	23.7	14.3	29.6	8.1	150.4	—	—	119.2
10	11.1	16.7	6.5	23.2	— 0.2	97.4	—	—	101.8
11	5.3	10.8	1.1	18.9	— 4.9	108.2	32	18	84.8
12	0.5	4.5	— 2.8	12.6	— 8.7	90.2	162	50	68.7
年間	9.4	14.6	11.9	21.6	— 2.4	101.9	284	135	114.2
統 計 期 間	昭和61 ～ 平成2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

<トマト栽培の歴史>

南郷トマトは昭和37年に南郷村の14戸の農家によって「トマト研究会」を結成し、50a栽培され

の基に栽培13年目にして、販売高1億円が達成された。

昭和50年には、当時の南郷農協に共同選果場が

設置され、この利用により出荷労力が大幅に軽減されたことを機に、栽培農家と面積は着実に増加し、昭和51年には野菜指定産地として国の指定を受け、昭和53年には当時の只見町農協にも選果場が設置されたため、栽培農家と面積は更に伸びていくこととなった。

昭和54年には栽培者数223名、面積32haと当産地においては最大規模となった。しかし、価格は暴落し、生産者には打撃を受けた年となり、これに栽培者の高齢化、担い手不足等、農村構造の変化要因が加わり、次年度より栽培者、面積とも減少の傾向となった。しかしながら今後の品質向上対策として簡易雨よけ栽培（アンブレラ方式）に取り組んだ年でもあった。

昭和62年においては、消費者ニーズの変化等に伴い、栽培以来5回目の品種更新を行い完熟系の「桃太郎」へと全面的に栽培を移行し品質の向上を図った。これと同時に安定生産・出荷のため、パイプハウス導入による施設化を翌63年度に渡り実施した。

「桃太郎」導入は、市場性に適応し高価格販売へとつながり、以降平成2年度には9億円を突破

し、更に平成6年度には念願の「南郷トマト」販売高10億円突破となった。しかし、実績の伸びとともに生産サイドでは、青枯病等の土壤病害が大きな問題となっていた。そこで試作段階から一部導入されていた「桃太郎8」に平成6年全面積切り替えとなった。

「桃太郎8」導入当初は、品種の特性的に「桃太郎」に比べて小玉傾向ということで小玉対策等を行ったが、比較的当産地においては問題とらなかった。

以上のような事柄を経て、現況（平成11年度実績）、南郷トマト組合員数130戸、栽培面積（ハウス実面積）28ha、販売額8億2千7万円となっている。

<トマト栽培の概要>

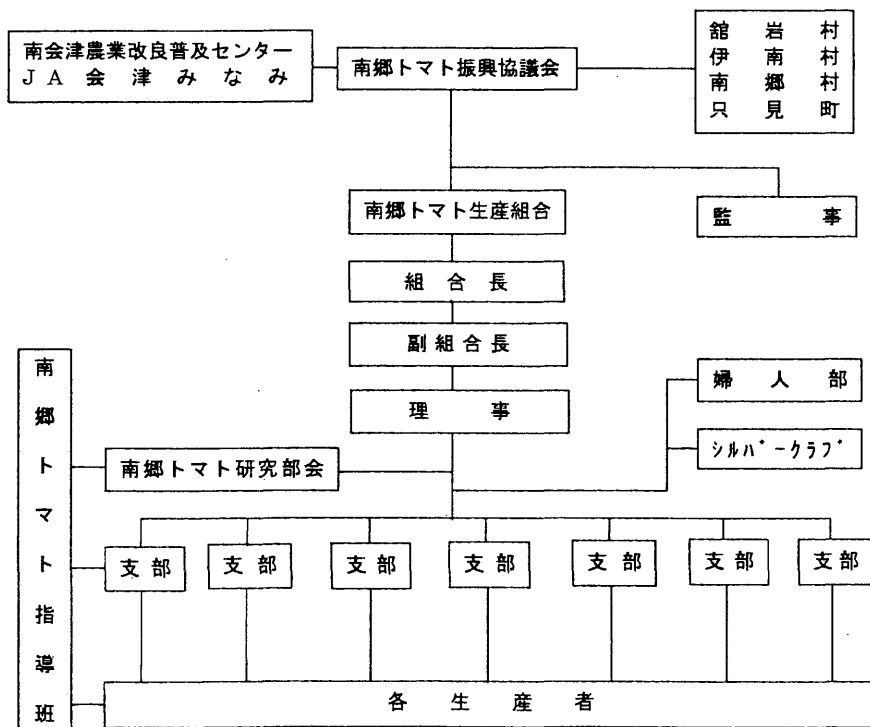
1. 育苗

現在、JAで発芽をさせ、それをトマト栽培者より選出した育苗担当者12名に配布し、12カ所に育苗床を設置し、発芽後から本葉2枚程度の移植ステージまでは共同育苗をおこなっている。以後の管理については各トマト農家で行っている、品種については、全面積「桃太郎8」で、約60万本を育苗し、そのうち約6割が接木で、その目的としては、青枯れ病対策が主である。

育苗は全量プラグトレを使用しているの、移植時の活着がスムーズで育苗前半の管理が容易になった。但し、管理面では、12カ所の離れた場所での管理となってしまうので、いかにその離れた場所において、穂木と台木の育成ステージを合わせ、均一な苗に育てるかが重要であり、今後の課題ともなっている。

さらに、個人への配布後の育苗期間において、今までは育苗後半に極端に肥切れを起こしてしまい定植時の活着が悪くなる場合が多

・南郷トマト組織図



・南郷トマトハウス雨除け栽培暦

月	旬	3		4		5			6			7			8			9			10			11		
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
生理 温度	日照 夜	28		26~25		28			26~25			28			25~26			28			25~26			28		
		20		15~12		20			12~10			20			12~10			20			12~10			20		
日照 夜	夜	20		25~23		20			25~18			20			25~18			20			25~18			20		
		20		19~18		20			15			20			15			20			15			20		
生育相		○		○		○			○			○			○			○			○			○		
着果目標		○		○		○			○			○			○			○			○			○		
採種		○		○		○			○			○			○			○			○			○		
本葉		○		○		○			○			○			○			○			○			○		
出始		○		○		○			○			○			○			○			○			○		
移植		○		○		○			○			○			○			○			○			○		
着色始		○		○		○			○			○			○			○			○			○		
収穫始		○		○		○			○			○			○			○			○			○		
天窓・屋根ビニール撤去																										

かったため、個人に配布された本葉2枚程度の苗は、被覆肥料を床土に施用し後半の育苗に備えて、極端な肥切れを回避するようにしている。この被覆肥料(チッソ旭製)は使用方法や性質を熟知すれば合理的なのだがまだそこまで至っていないのが現状であるので、メーカー担当者と適正な使用方法を良く検討してゆく必要がある。

2. 定植

栽植本数は坪6~7本で、果実への採光性や作業性を考え、通路・条間は広めに取り、支立て方法は、主枝直立1本支立てとしている。

特に定植時に気をつけているのは、圃場の水分状態である。土壌条件によってもその最適な状態が違うのでそれぞれの条件にあわせ水分を適量確保しておくよう心掛けている。これができていないと活着以後に根をどうこうということが難しくなってくる。

「桃太郎8」は、「桃太郎」とは細かい点で性格的に異なる点が多いので定植のステージやその後活着までの水管理等を、品種に合わせて行う必要がある。今後さらに良い方向へ向くよう検討が必要である。

3. 施肥

基肥のチッソの基準量は10a当たり20kg前後で、主体は被覆複合肥料(14-12-14)の100日タイプであるが、施肥量については土壌分析を行い、それに基づき施用している。

追肥は、基本的には第3花房開花始め頃から行い、以降草勢を見ながら所定間隔で行う。但し、1回目の追肥については、ためし灌水をして基肥の効き具合を見てから行うようにしている。

現在、当地区も灌水方法が散水方式から点滴方式へ変わりつつあるが、基肥の被覆肥料との連携がうまくとれば、均一施肥且つ省力施肥さらには低コスト施肥という一石三鳥への取り組みとしてその実現を目指している。

4. 一般管理

水管理については、温度、日照に合わせて生育をコントロールしながら出来るだけ土壌水分に極端な変化を与えないよう、少量多回数を心掛けている。

現在、灌水の様式も多様化しているため、設置

方法や灌水方法は、圃場の立地条件や水利条件に合わせて選択する必要がある。

交配については、栽培農家100%がマルハナバチを利用し、自然交配を行っている。利用によるメリットとしては、ホルモン処理の労力削減や品質向上があげられる。後者はホルモン処理に要する時間を管理面に回せることで実現する。もちろんデメリットもあるが、当産地の場合は、メリットの方が大きいため6年前より継続利用という状況である。

現在、7月中旬以降の高温時にマルハナバチの飛行状態が著しく悪化し、着果不良等が発生しその対応に苦しんでいるが、使用者のマルハナバチに関する知識の向上や工夫、各メーカーの企業努力等により少しずつ改善されている。

＜出荷・販売＞

平成5年度に第3次の選果場整備として、ロボット箱詰め、カラーセンサー付き選果機が導入されたことにより品質の向上、規格の統一が図られた。

更には簡易予冷庫の設置等で、品質保持が図ら

れた。平行して市場やJAを含む各関係機関との連携を深めるためトマト農家全戸にFAXを導入し、その通信網を利用し綿密な情報交換の基に有利取売が検討されている。

出荷は、7月中旬から10月末までの時期で、主に京浜市場へ出荷されている。

＜今後に向けて＞

品種の特性を十分理解し、その持ち味を最大限に引き出す栽培技術の確立、また、多種多様に進化する管理技術等に柔軟に対応し、適正に取り入れる形を持つこと。

平成12年には、パイプハウス雨除け栽培の完全実施（今まではアンブレラ方式の簡易雨除け栽培が2割程度残っていた）による品質の向上に取り組む。

上記に上げたような取り組みあるいはその姿勢を今後も継続し機動力のある産地づくりをし、販売面においては、輸入を含める産地間競争の激化等を踏まえ販売体制の強化・調整を行い、消費者ニーズに答え、常に求められるような産地づくりを積極的且つ迅速に進めていくことがこれからの「南郷トマト」に必要である。